炭団坂幻視

マル＊サトシ

東京は文京区小石川に越して来てまだ日の浅い二月の晴れの日。友人らと台東区浅草で会食する用事があったので、ぶらぶらと歩いて向かうことにした。

歩くのは好きだ。

小石川から浅草まで、ゆっくり三時間ほどの散歩となった。話はこのときに頭蓋を巡った妄想についてである。

が、その前にこの引っ越しについて、少し述べたほうが良さそうだ。

文京区小石川に憧れていた。

勤務地から遠ざかる方向で、毎日の通勤時間を思えば、普通はしないであろう引っ越しを敢えてした。

小石川は地下鉄四線が交叉し、交通の利便性は良い。通勤時間は片道二時間近くなるが、通えないことはない。この毎日の通勤時間を課されてもなお、僕はこの地に惹きつけられた。

その魅力のひとつは、東京の名所に囲まれて、散歩のポイントに事欠かないこと。谷中・根津・千駄木、東京大学、上野不忍池、湯島、湯島天神、御茶ノ水、神田神保町、神楽坂に神田川大曲、伝通院に小石川植物園、そして東京ドーム、後楽園。歩いて一時間とかからないエリアにこれらの見所が在る。

隣街である本郷も大きな魅力をたたえている。

東京都内で「文士村」と銘打っている街はふたつ。石坂洋次郎・子母沢寛・山本周五郎らの暮らした大田区は馬込文士村、それと、芥川龍之介・菊地寛・堀辰雄らが暮らした北区は田端文士村だ。

本郷は「文士村」とは謳っていないが、これらに負けない文士村である。

樋口一葉・石川啄木・坪内逍遙・金田一京助、彼らは本郷に暮らした。

この顔ぶれを見て判るであろうか？

本郷は――、近代文学発祥の地だ。

彼らがいたから、今日（こんにち）の日本の文芸がある。

僕にとって小石川という土地は――小石川自体は、ご年配の方も多く、ゆっくりとおちついた土地柄にちがいないのに――花街神楽坂と文芸発露の本郷にはさまれた、恐ろしく刺激的（エキサイティング）な街なのだ。

さて、先の散歩の話にもどろう。

小石川から浅草に向かう場合、東京大学と不忍池を迂回することになる。この日は、南側を巡るルートをとった。本郷に入り、菊坂を行くのが近道だ。ちなみに菊坂を抜けると本郷三丁目交差点の北側に出る。『本郷も「かねやす」までは江戸のうち』と唄われた雑貨商「かねやす」が現存するのが本郷三丁目交差点だ。

『文京ふるさと歴史館』ホームページより
http://www.city.bunkyo.lg.jp/rekishikan/

菊坂を行こうと思ったのは他にも理由があった。

今や五千円札にプリントされるまでになった樋口一葉（※壱）が困窮生活を送っていた当時の家、旧居跡がこの菊坂から少し入った所にある。その場所を確認したかった。

西片地区、北西側から菊坂に入り、南東の本郷通りに抜け

るつもりだった。「坂」と名が付いてはいるが、周囲からは谷にあたる位置にあり、全長も長いことから菊坂はとても緩やかな坂だ。名の由来は坂の周辺に菊畑があったからだとか。

菊坂に入って間もなく、右手側に明治期から続く「ゑちごや」がある。開業当初は青果店であったが、いまは甘味処だ。次に左手に見えてくる蔵が、一葉が着物を質入れした伊勢屋質店の蔵だ。

■菊坂・伊勢屋質店

菊坂裏に入り一葉の旧居跡を探す前に、宮沢賢治の旧居跡を確認した。

宮沢賢治がこの菊坂で暮らしたのは、大正十年の一時期。『注文の多い料理店』収録の『かしわばやしの夜』『どんぐりと山猫』などをここで書き上げた——と、案内板にあった。ちなみに、賢治が生まれた明治二十九年に、一葉は二十四歳の若さで他界している。

賢治は一葉の作品を読んだことがあったろうか？

一葉の旧居跡を探すのに手間取った。

「旧居跡はこちら→」的看板が並んでいるわけではない。しかも、以前からあった文京区の案内板がどうしたことか撤去されていたのだ。文献〔※弐〕の写真にあった、井戸と奥に立ち上がる階段で、ようやくその場所を特定した。

一葉は明治三年、現千代田区内幸町の生まれだが、都内を十五回も引っ越ししている。この井戸の手前に越してきたのは、明治二十三年九月。父を失ってから一年目、ちょうど二十歳の頃。この一年後には、来客があると手狭だという妹の意見から、井戸を挟んだ向かいの借家にまた越すことになるのだが、明治二十六年七月に現台東区竜泉に越すまで、都合三年近くをこの井戸の傍らで暮らしたことになる。

良き師でもあり、良きサポーターでもあり、恋人でもあった半井桃水（なからいとうすい）と出会ったのものこの時期だ。

■一葉旧居跡からの眺め

桃水の計らいもあって、一葉はこの菊坂で作家としてデビューし、『闇桜』『たま襷』『五月雨』『経づくえ』『うもれ木』『暁月夜』『雪の日』を上梓した。

一葉と桃水の話は、これだけで恋愛小説が書けそうなネタであるのだが、ここでは触れないでおく。散歩を急ごう。

菊坂をずっと行くつもりであったのだが、気が変わった。

坪内逍遙の旧居跡も見ておこう。以前にも見たことがあるのだが、今日は清々(すがすが)しい散歩日和、この際だ、近代の文豪〔※参〕を訪ねよう。

菊坂裏を南に入り、炭団(たどん)坂を登る。

こちらの坂は谷にあたる菊坂と真砂地区の高所をつなぐ路で結構な急勾配。転がり落ちた者が炭団のごとく泥だらけになった様からの命名だ。今は階段になっている。

この階段を上ったところに逍遙の旧居跡がある。一葉の旧居跡とは比較することもできない、立派な建物である。

『小説神髄』はここで書かれた。

案内板には、さらにこんなことも書かれていた――。

「逍遥転居後の明治二十年には旧伊予藩の育英事業として『常磐会』という寄宿舎になり、翌二十一年から三年余り正岡子規が寄宿していた」

明治二十年には逍遙はここで暮らしていなかった……。一葉が菊坂に越してきたのが、明治二十三年九月なので、逍遙と一葉との遭遇は考えにくい。

しかし、子規は――？

明治二十一年から二十四年までこの炭団坂上で暮らしていた子規と、二十三年九月から二十六年七月まで菊坂で暮らしていた一葉。数ヶ月が重なる。

ふたりの接近遭遇はありえる。

案内板には寄宿舎から下の菊坂を望みみた子規の歌が刻まれていた。

ガラス戸の外面に夜の森見えて清けき月に　鳴くほととぎす

子規が初めて吐血したのがここ伊予藩寄宿舎でのこと。この句はその直後に詠まれたのではなかろうか？　ここでの「ほととぎす」は、もちろん子規自身。「夜の森」「清けき月」「鳴く」……、自分の吐血におののきながらも潔くそれに向き合う子規の姿が目に浮かぶ。

その子規を真似るように炭団坂下、菊坂方向を眺めみる。そこには先に寄った宮沢賢治の旧居跡や、一葉の旧居跡、石川淳、宇野浩二、宇野千代、尾崎士郎、坂口安吾、谷崎潤一郎、直木三十五らが集った菊富士ホテルの跡もある。子規の望みみた森は、文学が茂る森となる。それを予見してほととぎすは鳴いたのか。

■炭団坂上から菊坂方向を見降ろす

二月のまだ冷たい風も僕の頭を冷ますことはできなかった。浅草への路を歩きながら「一葉と子規の出会い」という妄想が、頭の中でどんどんふくらんでいったのだ。

覧る限り一葉の資料にも、子規のそれにも、ふたりに交流があったなどとは記されていない……。

でも、ふたりは一時期、炭団坂の上下に、すぐ近くに暮らしていた。

――たとえば、それを明治二十四年の春としよう。

一葉が半井桃水の居た芝南佐久間町(現西新橋)に向かうとき、この炭団坂を登らなかっただろうか？　あるいは「かねやす」に歯磨き粉を買いに行くときに。

子規が夏目漱石に会いに東京帝国大学に向かうとき〔※四〕、この炭団坂を下らなかったろうか？　あるいは「ゑちごや」に胡瓜を買いに行くときに。

修業時代の英知二人が、お互い知らぬうちに炭団坂ですれ違っていたとしたら……。ひょっとして顔だけは見知って、会釈を交わしていたりとか……。

――そうだ。一葉も子規も結核がもとで亡くなっている。まさか、一葉の結核は子規からもらったものではあるまいな？〔※伍〕

散歩は「かねやす」を過ぎて、湯島に入る。湯島と言えば泉鏡花かな。

同じ空間、同じ土地を歩きながらも、時間の隔たりが僕と彼らを遠ざける。

そのようなあたりまえのことが、哀しくもあり、不思議（ファンタジック）にも思える。

僕は、一歩進むたび、まるで時間の階段を降りて行くように、昭和、大正、明治とタイムスリップしていく。

――散歩は妄想だ。

そして、妄想の中で僕は、樋口一葉に、正岡子規に、出会うのだ。〔※六〕

■本郷三丁目交差点「かねやす」

＝ 脚注 ＝

〔※壱〕五千円札の樋口一葉

日本紙幣に写真をもとにした女性の肖像が採用されたのは一葉が最初。

弐千円札の紫式部は写真ではないから。いや、そもそも肖像画としても認められていないらしい。

〔※弐〕参考文献

・『樋口一葉と歩く 明治・東京』監修・野口碩（小学館）

〔※参〕近代の文豪

松本清張の著作に『文豪』という評伝的連作小説がある。坪内逍遙の死と妻を巡る異説が解かれている他、明治の文壇で強烈な個性をはなった作家たちが活写されている。

〔※四〕正岡子規と夏目漱石

ふたりは仲の良い友人であった。

出会いは明治二十二年のこと。

その翌年の二十三年に、漱石は東京帝国大学（当時、帝国大学、現在の東京大学）英文科に入学している。寄宿舎『常磐会』から帝国大学に向かうには、炭団坂を下るのが近道だ。

■菊坂の案内板　「一葉文学のまち」

〔※伍〕結核

当時、市井にはコレラが流行していた。

下水道の完備が遅れたらしい。

神田下水が敷かれたのが明治十八年。本郷地区の下水がいつ完備されたかは、不勉強のため確認できていない。

しかし、文壇では結核が流行していたようだ？　一葉、子規の他、石川啄木なども結核で亡くなっている。

時代が下って大正、昭和になっても結核で亡くなる作家が多いようだ。森鴎外、堀辰雄なども。

〔※六〕出会い

僕はふたりに尋ねるだろう。

「おふたりは、炭団坂ですれ違っていませんか？　いやいや、ひょっとしてお知り合いではないですか？」

一葉と子規――、ふたりは微笑み、答えた。

（了）